

人の顔を描いた土器

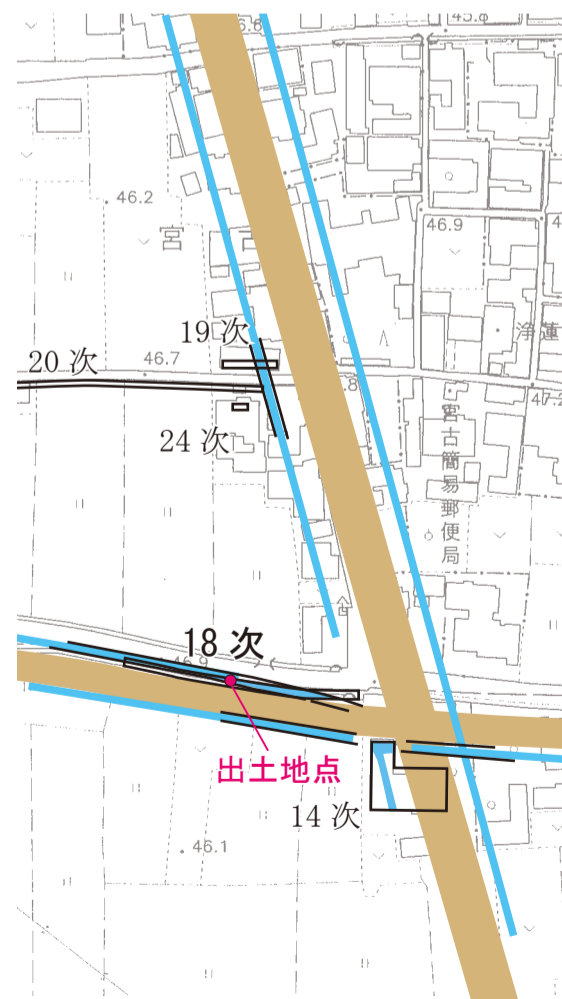
調査：保津・宮古遺跡 第18次調査

時代：奈良時代

6月の晦日（30日）または旧暦6月の末に近い日に、「夏越の大祓^{はらえ}」という行事が各地の神社で行われます。「茅の輪」をくぐり、自分の息を吹きかけた紙の人形^{ひとがた}を川に流すことで無病息災を祈ります。紙の人形が身代わりとなって悪い物を引き受け、川に流されることで清められると考えられています。

現在は紙の人形を川に流すこの行事ですが、奈良時代には土器に顔を描いたものが使われていたようです。

展示している土器は、2ヶ所に墨で顔を描いたもので、古代の道路「筋違道」と「保津・阪手道」の交差点付近の溝からみつけられました。道路の交差点は「巷^{ちまた}」とも呼ばれ、現世と異界を結ぶ接点と考えられていたそうです。古代の交通の要所で邪気を祓^{はら}う行事が行われていたのでしょう。



村屋神社の人形流し^{ひとがた}

大字宮古付近の「巷」^{ちまた}

